

## 献 辞

経済学部教授 藤 田 総 平

岡部先生は、1977年に都立大学助手から、埼玉大学旧教養部に着任された。教養部で教授に昇任され、その後、教養部解体にともない、1995年に経済学部に移られ、経済経営数学を担当して、現在に至っている。私とその一年後に旧教養部に着任して以来、すでに30年以上もの間、同僚としてお付き合いいただいている。

旧教養部時代で印象に残っていることは、その末期に某教官人事の採用の当否を決める教授会の席上で、この候補者の研究業績がとうてい真の学問とはいえないものだと、数十分にわたり熱弁をふるわれたことである。この候補者は、残念ながら、愚かな同僚たちの賛成多数——私もその一人であったことを、恥をしのんで告白しなければならない——の結果、採用され、教養部解体後は教養学部に移り、数年後大学に何の貢献もすることなく去っていった。教養部末期のごたごたと混乱の思い出の中で、そのことがある爽やかさの印象とともに心に残っているのである。

岡部先生の主著といえば、大変な反響を呼んだ、『分数ができない大学生：21世紀の日本が危ない』（東洋経済新報社、1999年6月）であろう。この本は、題名から想像されるような、単なる大学生の学力低下を嘆いたり批判したりするだけのものではない。むしろ、「ゆとり教育」の推進の結果、中学高校のカリキュラムがずたずたになったことを批判したものである。とくに、比の扱いが極度に軽くなったため、分数計算に歪みが生じたことを指摘している。この本は、教育論議の方向に大きな影響を与えた功績によって、2005年度日本数学会の出版賞を受賞した。

先生は、たくさんの著書をお持ちではあるが、ただ批判を書くだけにとどまる人ではない。学校教育の実践の分野においても活躍され、日本数学会の教育委員会委員長、日本数学協会の副会長を歴任し、学校への出張授業をこなされる一方、現行の学習指導要領改訂の協力者として、「数学基礎」を実質的に創案された。また、以前から、幾何学・解析学方面において、「Okabe Method」と呼ばれる積分の概念を利用した錘の体積計算などの直観的な手法を提案なさってきている。それらの方法は、新しい学習指導要領の「算数的・数学的活動」につながっているだけでなく、監修した教科書が支持を得ている理由にもなっている。たとえば、数研出版の『新編・数学』シリーズは、使用頻度が最も高い高校の数学教科書の地位を保っているし、また、検定外では、これも「ほとんど唯一」と言われるくらい高い支持を得た、中学高校6年間を通した数学教科書である、『体系数学』のシリーズ（数研出版、2003年2月～2004年1月、全6冊）がある。

岡部先生は、昨年末のスタッフセミナーでもその一端を示してくださったが、たいへんイマジネーションに富んだユーモアあふれるお人柄である。そのような資質が、おそらく、現在、雨後の筍のごとく出版されている、「マンガ……」本の嚆矢となった、『マンガ・微積分入門：楽しく読めて、よくわかる（ブルーバックス）』（講談社1994年2月）を生んだものと思われる。12月のスタッフセミナーでも、参加者は先生の作られたパズルに首をひねり、トイレットペーパーを使った円の面積の計算方法に感心したものであった。最近では、数学の体験型博物館である、お台場リスピーアの展示責任者として、来

館者がワークショップなどで、パズルを実際に作ったり、触れたりして数学の理論を実体験できる施設の立ち上げに関わられた。

このように、先生のこれまでの軌跡をたどってみると、私のようにいつまでもふらふらしている者とはことなり、一本の力強く太い線がまっすぐに描かれていることに気づくのである。その線の指し示すものは、リベラルアーツの上級4学科の根幹をなす数学、人間の真の教養としての数学であり、また、その普及であったと言えるだろう。

最後ではありますが、決して健康ではない御身体をいたわりつつ、今後もさまざまな分野でますますご活躍することを心から願っています。